慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近代用語としての「生活」と新語辞典
Sub Title	
Author	木村, 義之(Kimura, Yoshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2019
Jtitle	日本語と日本語教育 No.47 (2019. 3) ,p.33- 62
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20190300-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』47: 33-62（2019.3）

近代用語としての「生活」と新語辞典

木　村　義　之

はじめに

筆者が「生活」に注目したのは、木村（2015）で坪内逍遙『一読三歎　当世書生気質』（1885～86）の晩青堂版初出本文で、「定(さだ)めなき世(よ)も智恵(ちえ)あれば。どうか活計(くらし)はたつか弓(ゆみ)。」（第1回）と「くらし」に「活計」を対応させていた箇所が、約40年後の春陽堂版『逍遙選集』本文（1929）では、「定(さだ)めなき世(よ)も智慧(ちえ)あれば、どうか生活(くらし)はたつか弓(ゆみ)、」のように「くらし」に「生活」を対応させるという表記上の変化が見られたことがきっかけであった。

『日本国語大辞典　第2版』（2000～02、以下『日国』と略）によると、「生活」はすでに7世紀の中国史料に出典があり、日本側の用例でも平安時代の資料が見えるものの、これに続く用例は江戸初期まで飛んでいることから、「生活」が近世以前の日本語で活発に使用されていた語ではないと考えられる。このことは、すでに坂詰（1983）に論考があり、むしろ今日では使用頻度の低くなった「活計」のほうが中世から近世にかけて話し言葉でも使用されていたことも明らかになっている。

このような先行研究をふまえて、木村（2018）では「生活」という語が近代において、どのようなふるまいをし、近代の基本的な用語としての位置を占めるに至ったか経緯を記した。本稿では、「生活」が主に20世紀以降の新語辞典から合成語の造語成分としても多面的に用いられていることを明らかにし、近代用語として欠かせない存在になっていることを描こうとするものである。

1. 「生活」の意味

木村（2018）では、近代用語としての「生活」は、以下のような幅をもって使用されてきたことを記した。

（A）：生物が生命を維持するための活動。

（B）：社会的存在としての人間の活動。

（C）：人間として社会で活動するための経済的基盤を得るための活動。

現代では（C）のように用いられる「日々の生活」の意味を、主に「活計」が担っていた時代もあったが、現代では「生計」と言い換えられる。

（A）では、生物が特に「人間」であるとき、衣食住といった基本的活動を維持すること自体を「いのち」や「生命」と言い換えられる。（B）のように、人間がある社会で行う活動全般を「生活」と言うときは、最も近代用語としての用法が拡大した部分だと考えられる。（B）のような用法にある場合、その人物の思想、職業、立場、活動の分野などが多様に表現できる。こうした文化的ないし精神的活動について言う場合は、「生活」単独の用法よりも合成語による例が多くなる。これが「生活」がいわば術語の造語成分として造語力を強めていった理由と考えられる。

（B）の用法を思想用語として位置づけた例としては、斎藤龍太郎（1928）『文芸大辞典』で以下の項目が詳しいと思われる。

> （1）生活　（英 Life　仏 Vie　独 Leben）　生活は生命に同じい。即ち、人間、生物、若くは世界存在の内実であるところの本源的な動力活動を生活といふ。そしてこの活動は目的と統一とを要素としてもつてゐるから、生活は目的統一活動の合成的な作用であると云ひ得る。作用は同化、増大、分化の三つの働きで或。従つて、この作用が旺盛なれば旺盛なるほど生活（生命力）が豊富なりと云へるのである。芸術は如何なる意味からも、生活内容の具象化でなければならない。だから、芸術家にとつて、生活の浅薄なことは（芸術家に限つたことではないが、特に芸術家には）芸術家として致命的な欠陥である。

このように術語化された「生活」を見ると、A から B へ、B の中でも特「人間として」という根源的な問いに向かって「生活」が用いられた例としては、島木健作の小説『生活の探求』(1937) などが思想課題としての「生活」をタイトルに掲げていることから代表的な用法だと言えよう。そこには、「生活」を思索対象とする描かれ方がいくつも挙げることができる。

(2)　彼等は敢て自分達の生活を分裂させるのである。それが実際に形の上に現れては、職業と、「本来の仕事」との対立、不一致もしくは両者の無関係といふことになる。職業によつて云ひ現(ママ)される彼等の生活は、軽視され、それの現在の有様がどんなに不満なものであつても致し方のないものとして諦められ、そつとそのままにしておかれ、それとは別に「本来の仕事」によつて云ひ現されるもう一つの生活が打ち建てられ、そこにのみ生甲斐を見出さうとする。そのやうなもう一つの生活といふものは、現代ではほとんど不可能なことだ。「飯を食ふ」ための仕事が、時間とエネルギーの最後の一滴までも要求してゐるのだから。《略》人々はこの生活の二重性格を思ひ悩んではゐる。

島木健作 (1937)『生活の探求』五

ここで言う「生活」は先の筆者の分類で言えば、単なる (A)=「生命の維持」ではなく、人間としての生き方の追求、すなわち、(B)=「本来の仕事」と (C)=「「飯を食ふ」ための仕事」との対立と矛盾に苦悩する描写であると言えよう。

このような「生活」の取り上げ方は、「〜生活」という合成語の多用にも見ることができる。

2.　20 世紀初頭和英辞書の「生活」

(2) に見る「生活」の用法が、作品の特殊性ということにとどまらず、当時の社会的背景と関連が深かったことを知るために、20 世紀初頭の和英辞書に「生活」がどのように記述されているかを取り上げてみよう。和

英辞書は実用性と時事性が求められるので、国語辞書に比べると例文や例語に時代の反映がなされるものと期待されるからである。

（3）Seikatsu, 生活，n.　［生命］Life; ［生存］existence; ［糊口］livelihood; subsistence.　生活する，to live; to support one's life; to get one's living; 人は空気を食つて生活できない．We can not live by air.

山口造酒・入江祝衛（1907）『註解和英新辞典』

（4）Seikatsu（生活），n.　Life; livelihood. ―・suru vi.　To live; support oneself; get one's living.　国の進歩と共に生活は益益困難となる．With national progress living becomes more and more difficult.　何というても生活問題が先に立つ．Say what we may, the question of livelihood comes first of all.　彼は贅沢に生活してゐる．He lives in luxury.

井上十吉（1911）『新訳和英辞典』

（5）seikatsu（生活）a　n.Life; existence; livelihood.　b　~suru. v. Live; support oneself; get one's living.　生活力 vitality. 生活問題 the question of how to live. 生活費 cost of living.　生活機能 the function of a living being. 内的生活 the inner life.　霊的（公的）生活 spiritual（the public）life/　二重生活 dual life.　生活を営む to live a life.《略》. Life with our people has become to be one of extreme hardship.seikatsunan（生活難）n.　Hard living; troubles of livelihood; strain of civilized life; a hard life; a city life. 都会の生活難　the pressure of city life.《以下略》

武信由太郎（1918）『武信和英大辞典』

（6）seikatsu（生活〔セイクワツ〕）n.　life; living; existence; livelihood. ―実生活，a practical life. ―現実生活，a real life. ―知（情）的生活，an intellectual（emotional）life. ―私（公）的生活，one's praivate（public）

life. ―団体（個人）生活，a collective（individual）life. ―軍隊（学校）生活，barrack（school）life. ―国家生活，state life; national life. ―都市（田園）生活，city（country）life; urban（rural）life. ―共同生活，communal life. ―上（下）流の生活，high（low）life. ―悲惨の生活，wretched existence; a miserable life. ―日々の生活，daily life. 充実した意義ある生活，a full and significant life. ―手から口への生活，hand-to-mouth life; precarious life. ―生活問題，a question of livelihood. ―生活改善展覧会，a life improvement[reform] exhibition. ―生活の『本拠』，―生活の裏面，the seamy side of life. ―生活の改造，reorganization of life. ―質素の生活と高遠の思索，plain living and higher thinking. ―生活の為の芸術，art for life's sake. ―生活に即した文芸，literature devoted to life. ―生活を一新する，to give a new turn to one's life; put on the new man.―-suru（生活する），vi.　to live; get one's living[livelihood]; support oneself. ―身分（不）相応の生活をする，to live within（beyond）one's means. ―-hi（生活費），n.　cost of living. ―生活費を儲ける，to make one's bread; earn one's living. ―-jōtai（生活状態〔ジヤウタイ〕），n.　the condition of life.―-kinō（生活機能〔キノウ〕），vital function. ―生活機能学，biodynamics.―-nan（生活難），n.　difficulties of living; high cost of living.―-ryoku（生活力），n.　vital force[principle; energies]; vitality. ―新生活力論，neovitalism―-tai（生活体），n.　a（living）organism; an organic body.《以下略》

井上十吉（1921）『井上和英大辞典』

（3）～（6）は、辞書としての規模も異なるが、約 15 年の間に「生活」の記述は複雑になり、（5）（6）のようにやや規模の大きな辞書では、「生活～」「～生活」のような合成語を多く掲げるようになる。同じ編者で規模の異なる（4）と（6）の間でも、「生活」の例文には社会的・思想的背景を備えたものが多くなり、時代の要請としてそのような例文を作成する需要に応え

ようとしていることがわかる。この中には（5）（6）に見える「生活力」に対して vitality、vital force といった訳が付されているが、現代の「生活力」はどちらかと言えば経済的基盤に基づく能力に偏っており、当期の「生活力」は、身体機能にかかわる意味なので、現代の「生命力」に近い意味で使われている。同じく（5）「生活機能 the function of a living being.」、（6）「—-kinō（生活機能〔キノウ〕），vital function. —生活機能学，biodynamics.」も生命体、生物学に関連する「生活」の用法である。「生活」が現代の「生命」や「生物」に近い意味、すなわち生命活動の意で用いられているのは、19 世紀的な用法の名残と言えよう[1]。

「生活」に「生命」の意が重ねられていた例は、ほかに「生活素」という語が目を引く。これは『日国』には見えず、『大漢和辞典　修訂版』（1984～86、以下、『大漢和』と略）に見える「生活素」の語釈には「ビタミンをいふ。活力素。」とあるが、出典はない。遡ってみると、20 世紀初頭の落合直文・芳賀矢一編『日本大辞典　言泉』（1921～29、以下『言泉』と略）に立項されていたが、語釈には「〔医〕びたみんに同じ。」とあり、医学用語であったようである。また、平凡社編（1934～36）『大辞典』の語釈には「栄養素に対しヴィタミンを生活素といふことあり。」とも見えるが、漢語訳としては定着しえず、「ビタミン」が現代に伝わったということであろう。ただし、比喩的な用法もあったようで、

（7）いはゆる新人の言論の力よりも、またはこれを自由ならしめたる普通選挙の制度よりも、更に一段の底を流れて居る各自治体の生活素が、始めてこの機会に乗じて目覚めかつ働きだしたかと思はれることは、国の前途に関心する人々に取つて、何よりの心強さである。

柳田国男（1929）「自治と新選挙」

のように、いわば「生命力」や「活力」に置き換えられそうな例が見いだされた。さらに医師で詩人・劇作家でもあった木下杢太郎の随筆には、

（8）少くとも生物学はこれからだんだんと面白くなる。病理学は細胞

病理学、体液病理学では足りなくなって、生活素小体を単位とする病理学となるであろう。

木下杢太郎（1940）「研究室裏の空想」

という用語が見える。これも「生命体」と置き換えられるように思われるが、20 世紀初頭の辞書には「生活」を造語成分に持ちながら、今日に伝わらない語が観察できる。

『日国』『大漢和』に立項がないものの、『言泉』に立項されている「生活点」も「生命」に関連する「生活」の合成語として使われていたようである。これは、新語辞典のほうに早く採られ、小林花眠（1922）『新しき用語の泉』に「呼吸中枢のこと。これを毀傷するときは直ちに死するが揺れに云ふ。」と記される。今日では医学用語から一般人の知るところとなった「生活反応」に「生命」と「生活」の接近を見ることができるが、その他の語はかなり棲み分けがなされてきたと言えるだろう。新語辞典は辞書として、載録した語に規範を求めるといった性格よりも、時事的話題を重んじる性格が優るので、これらを観察することは国語辞書から漏れた隙間の情報を埋めるためにも、時代背景との関連を概観するためにも、検証には意味があると考える。

3. 新語辞典の「生活」

新語辞典の「生活」の記述は、国語辞典とは記述の姿勢が異なっていることは、(1) の例からもわかるが、「生活」が一種の流行語のような位置を得ていたことの材料をもう少し補強しておこう。

(9) 生活（せいくわつ）の　　近頃は何につけても「生活」といふ言葉がやかましく叫（さけ）ばれてゐる。例へば「生活の文学」とか、「生活の哲学（てつがく）」とか、「生活のスポーツ」だとか、うるさいまでに生活といふ言葉を冠（かぶ）せたがる。事ほどそれほど、人間の生活といふことが反省（はんせい）されて来たのである。但（ただ）し茲（ここ）にいふ生活は食ふとか、遊ぶとか、仕事をするとかだけの所謂

物質生活のみを指すのではなく、精神生活をも含めた全的生活であり、全体としての人間生活即ち人生を指してゐることに留意したい。従つて「人生の為の」「人生をより高く深く広くする為の」といふやうな考へ方に立つて、我等の周囲の凡ゆる事象を、例へば文学でも、芸術でも、職業でもを振返つて見なければならぬ。そこから生活の線に沿うて再出発することが大切である。

吉本英一（1940）『新語と新形容』

（9）は「生活の」を見出し語としており、付加的な意味を持つ用法として注目している点で類のない用例だと思われる。筆者が先に仮設したBの用法に近い解説であり、人間性に価値を置いた記述となっている。生命の維持それ自体はもはや当然のこととしてとらえられ、生活の質的向上に関心が向かっている時代相を描いたものと言える。ここで言う「近頃」には著者の観察記述と出版年との間にタイムラグがあることを承知しておかなければならない。「生活」を見出し語として掲げてはいないが、次の（10）の例は、すでに（9）の内容を盛り込んだ記述となっている。

（10）生きる　「生きる」といふ語は近来の流行語だ。しかし、その意義は用ひ所によつて様々である。「私は私の生活を生きる」の場合は「営む」に当り、「生きる為のペン」の場合には「食はんが」の意となり、「永遠に生きる」の場合には「精神的生命の存続」を意味する。

下中芳岳（1914）『や、此は便利だ』

単なる生命から、価値ある生命へという含意が「生活」に見られ、「物質生活」から「精神生活」へと転換を図ろうとする時代の空気を感じ取ることができるだろう。こうした精神面を重視する生活の追究は（2）で見たように、理想と現実との間で葛藤を生むこととなり、新語辞典にも「第一義の生活」といった見出しが立つ。

（11）第一義といふのは、根本・無上の義である。然らば、私どもの生活で、何が根本であり無上であるか、即ち第一義の生活は何か。此

の疑問は、思想に於て自由を考ふべく放たれたる現在人に当然起り来る問題である。その答案は？「方便的（ほうべんてき）、因襲的（いんしうてき）に社会生活の旧様式に縛せられて、無自覚に、その日活（ひぐら）しに営んで居る我々の日常の生活は、それは、吾々に取つての第一義の生活ではない、我々は吾々自身の個性を中心として、自覚的に、吾々の本然の要求に従つての生活それが第一義の生活である」と。此の第一義の生活に対して、因襲に囚はれた社会生活は「第二義の生活」であると言はれる。

下中芳岳（1914）『や、此は便利だ』

（2）では「人々はこの生活の二重性格を思ひ悩んではゐる。」と記していたが、「二重生活」という語の使用にもつながる（4.3 参照）。

4. 「生活」の合成語と新語辞典

次に、20 世紀前半の主な新語辞典を通覧して、「～生活」「生活～」という合成語がどの程度見出し語として取り上げられ、そこにはどのような特徴が見られるのかを取り上げることにしたい。

調査対象とした新語辞典は、以下の‘ア 1～ニ’の 26 点[2] だが、時代の異なる大規模国語辞典との関連も視野に入れようと考え、先に言及した『日国』『言泉』『大辞典』も合せて調査した。

日国：『日本国語大辞典　第 2 版』

言泉：『日本大辞典　言泉』

大辞：『大辞典』

ア 1 ：下中芳岳（1914）『や、此は便利だ』

イ　：小山内薫（1918）『文芸新語辞典』

ウ　：生田長江（1918）『新文学辞典』

エ 1 ：服部嘉香・植原路郎（1918）『新しい言葉の字引』

ア 2 ：下中芳岳（1919）『増補改版　や、此は便利だ』

オ　：時代研究会（1919）『現代新語辞典』

カ　：上田景二（1919）『模範新語通語大辞典』

エ2：服部嘉香・植原路郎（1920）『訂正増補　新しい言葉の字引』

キ　：小林鶯里（1920）『現代日用新語辞典』

ク　：小林花眠（1922）『新しき用語の泉』

ケ　：小山内薫（1925）『最新現代用語辞典』

コ　：上田由太郎（1925）『英語から生まれた現代語辞典』

エ3：服部嘉香・植原路郎（1925）『大増補新しい言葉の字引』

サ　：斎藤龍太郎（1928）『文芸大辞典』

シ　：竹野長次（1928）『近代新用語辞典』

ア3：下中弥三郎（1929）『大増補全部改版　や、此は便利だ』

ス　：川口浩（1930）『プロレタリア文芸辞典』

セ　：小島徳彌（1931）『モダン新用語辞典』

ソ　：小山湖南（1931）『これ一つで何でも分る現代新語集成』

タ　：改造社出版部（1932）『最新百科社会語辞典』

チ　：伊藤晃二（1933）『常用モダン語辞典』

ツ　：関田清吉（1938）『国民辞典今日の言葉』

テ　：植島清一（1942）『時局新語解説』

ト　：日本ジャーナリスト連盟（1948）『現代新語辞典』

ナ　：第一政経研究所（1948）『新修改版新聞雑誌辞典』

ニ　：渡辺紳一郎（1950）『新語百科辞典』

これらの文献から「生活」が造語成分となっているものを網羅的に抽出したが、検討するのは、2次結合以上の高次結合の語を除くものとする。これらは、制度や組織の名称となることが多く、複数の造語成分からなる語であるため、語義を推測しやすいこともあり、表からは除外した[3]。ただし、「芸術的生活」のように接辞「的」と結合した1回結合した語基は品詞性が相言類に変化するため、「生活」とが結合した語の熟合度が高いと判断して表に含めた。

4.1　前部分となる「生活」

「生活」が合成語の前部分となって「生活～」の形となる辞書掲載語は以下の表Ｉのようになる[4]。

「生活～」は、主に後部分と「生活するうえでの～」という意味で結合している。しかし、これまで「生活」には2、3で見てきたように、現代語で最も代表的な（C）としての意味だけではなく、新語辞典には20世紀初頭に見られた（A）、（B）を意味する語が見える。「生活意志」（1、以下、算用数字は表左端の整理番号）は、多くの新語辞典に見出し語として採用されているが、これも思想用語とした翻訳された語が流通したものである。

（12）人は誰しも、生き度いといふ欲望乃至意志がある。この、心の中の不断に働く生きんとする願ひ、それが生活意志である。ショペンハエウル（ママ）は、これを非理性的・無意志的・盲目的の生活意志と呼んだ。独逸語の Wille zum Leben　である。　（ク）

同様に、「生活意識」（2）、「生活感情」（11）も翻訳による思想用語としての記述が見られる。

（13）（生活意識　Leben-sgefühl）生活感情と同義。生そのものに対する意識とか感情とかを総称して云ふ。　（シ）

「生活内容」（51）も精神性を重視した語と見られ、

（14）私は氏に向かって、真理の追求と生活内容の獲得とで精一杯で、これを美しく表現するというところまではとうてい手がおよばないし、そういう志もない、と話した。

塩尻公明（1956）「わが心の歌」

のような用法でも例を見出すことができる。

また、新語辞典には「生活改善」（4）、「生活難」（52）、「生活問題」（67）などは、経済問題としての「生活」に関する語で、世相を反映した語で、

（15）生活難　生存の為の「衣食の料」を得ることの困難。　（ア1）

と見える。同書には、別の見出し語でも、

表 I

		日国	言泉	大辞	ア 1	イ	ウ	エ 1	ア 2	オ	カ	エ 2	キ	ク
1	生活意志					○	○			○	○		○	○
2	生活意識													
3	生活科	○												
4	生活改善	○		○	△									
5	生活学習	○												
6	生活革命										○			○
7	生活学校	○												
8	生活館	○												
9	生活感覚			▼										
10	生活環境	○												
11	生活感情	○												
12	生活感	○												
13	生活環	○												
14	生活機能	○	○				○						▼	○
15	生活気分					○								○
16	生活給	○												
17	生活教育	○												
18	生活記録	○												
19	生活空間	○												
20	生活苦悩						○							
21	生活苦	○												
22	生活形(型)	○												
23	生活圏	○												
24	生活権	○												
25	生活現象	○	○	○										
26	生活原理	○												
27	生活指導	○												
28	生活者	○												
29	生活主義			○										
30	生活状態	○												
31	生活資料	○												
32	生活人	○												
33	生活信条													
34	生活史	○												
35	生活信条	○												

ケ	コ	エ3	サ	シ	ア3	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ
○		○	○	○	○			○		○					
				○											
○				○											
						○	○		○					○	
			○												
													○	○	
						○	○								

表I　続き

		日国	言泉	大辞	ア1	イ	ウ	エ1	ア2	オ	カ	エ2	キ	ク
36	生活水準	○												
37	生活設計	○												
38	生活戦争													
39	生活素		○											
40	生活体	○	○	○										
41	生活体験	○												
42	生活態度	○												
43	生活単元	○												
44	生活地理													
45	生活賃金	○												
46	生活賃銀			○										
47	生活綴方	○												
48	生活程度	○												
49	生活哲学			▼										
50	生活点		○											○
51	生活内容			○										
52	生活難	○	○	○	○				○	○				○
53	生活年齢	○												
54	生活能力	○												
55	生活派	○		○										
56	生活排水	○												
57	生活範囲				△									
58	生活反応	○												
59	生活費	○	○	○										
60	生活標準	○		○										
61	生活扶助	○												
62	生活物資	○												
63	生活物質		○											
64	生活振	○												
65	生活法	○												
66	生活保護	○												
67	生活問題	○			△									
68	生活擁護										○			○
69	生活様式	○			△									
70	生活欲	○												
71	生活裡	○												
72	生活離	○												
73	生活力	○												

ケ	コ	エ3	サ	シ	ア3	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ
												○			
○				○								○			
														○	
	○			○	○	○	○								
															○
															○

（16）ユーゼニクス（Eugenics） 訳して人種改善学といふ。現在の社会に漲る生活難てふ灰色の潮は、健全なる中等階級を侵して、次第に下層階級に押し沈めつゝある。かくの如き、中等階級縮小の事実は、全体として人類的価値の低下を示すもので、真に寒心すべき傾向である。（ア 1）

と記し、問題視していることがわかる。

また、2 で見たように、「生命」の意で用いられる「生活機能」（14）、「生活素」（39）、「生活体」（40）、「生活点」（50）、「生活反応」（53）がある。「生活力」（73）は、『日国』にしか見られないが、経済面の能力、生命力の二つのブランチを立てて説明している。芥川龍之介の随筆でも次のように「生命力」との類語であることがわかる例が見える。

（17）我々人間は人間獣である為に動物的に死を怖れてゐる。所謂（いはゆる）生活力と云ふものは実は動物力の異名に過ぎない。

芥川龍之介（1927）「或旧友へ送る手記」

このように、前部分となる「生活」は 20 世紀前半ではしばしば「生命」の意でとらえなければ文意を読み誤るおそれがあるので留意すべきであろう。

4.2 後部分となる「生活」

次に、「生活」が後部分となって「～生活」の形となる辞書掲載語は以下の表Ⅱのようになる。

「生活」が後部分になる語は、前部分が用言類（主に漢語サ変動詞の語幹相当）、体言類、相言類（「語基＋的」形式を含む）なので、これらが「生活」の修飾成分となる。

前部分が用言類となる語は、次のような例が見られる。

隠遁生活（76） 合宿生活（80） 共同生活（87） 禁欲生活（89） 下宿生活（93） 結婚生活（94） 自炊生活（102） 創造生活（125） 耐乏生

活（126）　耽溺生活（130）　表現生活（147）　浮浪生活（151）　放浪生活（153）　恋愛生活（161）　労働生活（162）

これらは、前部分が具体的内容を表しているので、どのような生活かが推測しやすい。もっとも、当時の「共同生活」には、（18）のような意味の拡張も見られたようで、多くの新語辞典で載録している。ある。

（18）【共同生活（キヨードーセイカツ）】　共同して生活を営むといふ意味であるが、近来は男と女が結婚の目的なし共同の生活をすることに用ひられてゐる。これは平塚雷鳥といふ女が、奥村博と同棲しながら、自分は共同生活をやつてゐると云つたに始まるもの。併し男女の共同生活は、多く自由結婚に始まるか、また其れに終るところから、共同生活の語は直ちに自由結婚と同意味に解せられる。　（ク）

体言類が「生活」と意味的にどのように結合しているかについては、次のようなパターンを見ることができる。

立場・関係（～トシテノ）：学生生活（78）　国民生活（98）　個人生活（99）　市民生活（109）　集団生活（112）　書生生活（117）　単独生活（131）　独身生活（138）　夫婦生活（148）　寮生活（159）

場（～デノ）：学校生活（79）　家庭生活（81）　郊外生活（97）　寺院生活（101）　森林生活（119）　水上生活（120）　田園生活（133）　テント生活（134）　天幕生活（136）　都市生活（139）

比喩（～ノヨウナ）：植物生活（116）　筍生活（127）　鳩豆生活（145）　蜂窩生活（152）

「立場・関係」は特に説明を要しないだろうが、「場」は実際の空間だけではなく、拠り所となる場を全般的に指す語も少なくない。たとえば、次の（19）～（22）は内容や背景に関連性をもつ。

（19）郊外生活　近ごろは、塵埃や煤烟の多い都市生活からのがれて、郊外の清浄な空気の中に生活する者が多くなつた。そのために、都市の家屋は単に商業上の事務所に充てゝ、市街に近き郊外に居住地を定

表 II

		日国	言泉	大辞	ア1	イ	ウ	エ1	ア2	オ	カ	エ2	キ
74	安価生活			○									
75	衣生活	○											
76	隠遁生活					○							
77	外的生活	○											
78	学生生活	○											
79	学校生活	○	○										
80	合宿生活	○											
81	家庭生活	○											
82	カノン的生活			○									
83	簡易生活	○			○			○	○	○		○	
84	寄生生活	○	○	▼									
85	犠牲生活			○									
86	旧生活				△								
87	共同生活	○	○					○		○	○	○	○
88	近代生活				△								
89	禁欲生活	○											
90	経済生活	○		○			○						
91	経済的生活			▼									
92	芸術的生活												
93	下宿生活	○	○										
94	結婚生活	○											
95	言語生活	○											
96	原始生活					○							
97	郊外生活	○		○									
98	国民生活	○											
99	個人生活				△								
100	国家生活				△								
101	寺院生活						○						
102	自炊生活	○											
103	私生活	○											
104	自然的生活							○				○	
105	思想的生活												
106	実行的生活												
107	実際生活	○											
108	実生活	○			△								○
109	市民生活				△								
110	社会生活	○	○	○	△								

ク	ケ	コ	エ3	サ	シ	ア3	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ
○	○				○						○					
											○					
○	○	○	○		○	○					○					
○	○	○	○		○						○					
											○					
○	○															
○				○							○					
○	○										○					
○	○		○	○							○					
	○										○					
○	○										○					

表 II

		日国	言泉	大辞	ア 1	イ	ウ	エ 1	ア 2	オ	カ	エ 2	キ
111	社会的生活		○					○				○	○
112	集団生活	○											
113	純一生活						○						
114	衝動生活				△								
115	食生活	○											
116	植物生活						○						
117	書生生活	○											
118	新生活	○			△	○							
119	森林生活						○		○				
120	水上生活	○											
121	精神生活	○	○	○		○	○	○		○		○	○
122	性生活	○		○									
123	全生活	○											
124	全的生活								○				
125	創造生活												
126	耐乏生活	○											
127	筍生活	○											
128	単純生活						○		▼				
129	団体生活	○		○	△								
130	耽溺生活					○							
131	単独生活			○									
132	デカダン生活												
133	田園生活	○	○	○	△	○	○						
134	テント生活	○		▼									
135	天然生活	○							○	○			
136	天幕生活	○		△									
137	動的生活				△								
138	独身生活	○											
139	都市生活				△								
140	内生活	○											
141	内的生活	○				○	○			▼	▼		○
142	内面生活	○											
143	二重生活	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
144	日常生活	○											
145	鳩豆生活												
146	美的生活	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

ク	ケ	コ	エ3	サ	シ	ア3	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ
○	○		○	○							○					
○																
○					▼											
○	○			○		○					○					
○	○		○		○						○					
▼																
						○			○							
									○							
															○	
○		▼				▼										
	○				○											
○	○		○		○						○					
									○							
○						○										
○	○			○	○						○					
					○											
○	○	○	○	▼	○				○		○		○			
○						○										
○	○	○		○	○	○			○							

表 II

	日国	言泉	大辞	ア1	イ	ウ	エ1	ア2	オ	カ	エ2	キ
147　表現生活				△								
148　夫婦生活	○											
149　舞台生活		○	○									
150　浮浪生活							○				○	○
151　文化生活	○	○	○									
152　蜂窩生活												
153　放浪生活	○	○					○		○		○	○
154　本然生活					○							
155　本能生活												
156　本能的生活												
157　予算生活	○											
158　理想生活				△								
159　寮生活	○											
160　霊的生活												
161　恋愛生活		○			○	○						
162　労働生活		○	○									
163　浪浪生活	○											

めるの風が盛んになり、日に月に郊外に向つて都会生活が発展して行く状況にある。（ク）

（20）森林生活　米国のエスマンの学徒にヘンリイ・ダビツド・トロオ（一八一七―六二）がある。エマスンをコンコオドの哲人と言へば、是はワルデンの隠者といつてもいゝ。ワルデンの森林に隠退して静かな生活を送つた。其の事を「我が森林生活」と云ふ著に委しく書いてある。（ウ）

（21）田園生活【Country life; Rural life】都会を離れて、田園の間に住み、農事などに生活を送ること。（都会生活の対）（ウ）

（22）田園生活　都会生活（とくわいせいくわつ）の煩雑と不健康に追はれて、交通の便利のある郊外（かうぐわい）に住宅を移すのが普通（ふつう）であるが、それも尚ほ都会の影響（えいきやう）があるので、更に一層田舎へ引込（ひつこ）んで生活する者が多い。風物（ふうぶつ）すべて鄙。肥（こえ）の臭（にほひ）を嗅ぎながら読書したり、庭いぢり、畑の世話（せわ）などもすれば、

ク	ケ	コ	エ3	サ	シ	ア3	ス	セ	ソ	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ
○	○	○									○					
	○	○	○		○	○			○		○					
											○					
○	○		○		○						○					
									○							
	○				○						○					
					○						○					
○	○	○			○						○					

立派な田園生活である。（エ3）

いずれも、「郊外」「森林」「田園」という空間的場であると同時に、生活の豊かさを求めて拠点とする精神的な拠り所という意味にも解釈できる。海外の思想的流行に示唆された当時の社会的風潮が新語辞典の記述に反映したものであろう。

さて、比喩に分類した「植物生活」は他とは異なり、メタファーとしてわかりにくいので、次にその語釈を掲げておこう。

（23）植物生活【Planet life】　シユレーゲルやノールアリス等の如きはオイドルネツス（無為）を人間最高の理想を立て人は主として植物生活の如く受動的になつてこそ真人間の真趣に近い云々と云つたり、無為は少数の傑士の特徴にして特権であると云つたり無為はインオーセンス、インスピレーシヨン『無邪と神来』とを生活せしむる雰囲気であると云つたりして全力を傾けて無為生活の弁護を試みた。（坪内雄

蔵）　（ウ）

端的には「植物ノヨウナ（無為ノ）生活」という意になろうか。「植物的生活」としても訳語として内容は変わらないように思われる。

上述のように、「立場・関係」「場」「比喩」といった関係では説明をつけにくい語も多い。ここで、これらの語について取り上げよう。

新語辞書に多く取り上げられている語として、「簡易生活」（83）がある。この語は品詞性を手掛かりにして「簡易ナ生活」としても内容の推測がしにくい。次の例を見てみよう。

（24）【簡易生活】　生活に対する不安・動揺（どうえう）を避けるための生活態度。ワグナーの“Simple life”は日本でも汎（ひろ）く読まれたようだ。

（エ 1）

（24）から、sipmle の訳語に「簡易」を対応させたことによる語であることがわかる。「単純生活」（128）の訳語もあり、いくつかの辞書ではこれを空見出しとして立て、「シンプルライフ」に送っている。

また、「純一生活」（113）という語も文芸思想用語であるから、「純一ノ生活」としても理解が及ばない。

（25）純一生活　純一の生活には上下の差別のある筈がない。私は自然の中にタイラントを認めた事はない。私たちは自分の情緒を他に屈従せしめ、若くは他に押へられ、また自分で押へる必要はない。《略》（吉江孤雁）　（イ）

端的に言えば、自然の理にかなった差別のない生活ということである。

（24）（25）の例を手掛かりにすると、前部分 X と後部分の「生活」との関係は、「X（トイウ面）ヲ中心ニ据エタ生活」または、「X（トイウ面）ニ注目シタ生活」と考えられそうである。こうした関係になる語は、前部分が「的」と結合した成分とも言い換えが可能になるものが多いようである。

安価生活（74）　衣生活（75）　外的生活（77）　経済（的）生活（90・91）　芸術的生活（92）　言語生活（95）　原始生活（96）　国家生活

（100） 自然的生活（104） 思想的生活（105） 実行的生活（106） 実際生活（107） 社会（的）生活（110・111） 性生活（122） 全（的）生活（123・124） デカダン生活（132） 天然生活（135） 内（的）生活（140・141） 内面生活（142） 美的生活（146） 本然生活（154） 本能（的）生活（155・156） 霊的生活（160） 予算生活（157） 理想生活（158）

上のいくつかを引用すると、

（26）アンカセイカツ（安価生活） 最初額賀医学博士の唱道（しやうだう）した語で、滋養成分（じやうせいぶん）を主眼として安価な食物を常食す可しとなす主張であるが、今では普通は衣食住（いしよくぢうす）総べてを成る可く簡単（かんたん）に軽便（けいべん）にすると云ふ意味によく用ひられてゐる。 （シ）

のように、「安価（トイウ面）ヲ中心ニ据エタ生活」となる。

20 世紀初頭に多く用いられたものの、今日ではほとんど使用されていない語として「内（的）生活」がある。「内的」は「外的」と対になって、次のように説明されている。

（27）内的（形） 外的の対。自我に関係あるものを内的と云ひ、非我に係るものを外的と云ふ。従つて、身体以外の現象を外的と名づけ、身体に関はることを内的と呼ぶ。更に、身体をも外的現象となし、精神現象を以て内的となす。凡て感官的に知覚されるものは外的で、感情、熱意の如き直接経験の内容を内的と云ふ。 （イ）

そのうえで同書は「内的生活」に（28）のような語釈を与えている。

（28）内的生活（名） 心内の生活。精神生活とも云ふ。 （イ）

今日では、「精神（的）」、「肉体（的）」または「物質（的）」とに交替した語と言える。これらを総合した語が「全（的）生活」ということになる。

（29）全的生活（ぜんてきせいくわつ） 精神と肉体とを分離して考へずに、精神生活即ち肉体生活であるとの見地に生活するをいふ。平たく言へば、花を見るのも肉を食ふのも共に「我」の必要を充たすのであつて、どちらが高尚

の、どちらが劣悪のといふ差違はないといふのである。《略》　（ア 2）

この「全的」も「総合的」などに交替して、今日には伝わらない。

同様に「美的生活」も多くの辞書が掲載しているが、「美ヲ重視シタ生活」あるいは「美ニ価値ヲ置ク生活」と言い換えられる。

（30）美的生活【Æsthetical life】　美を人生の中心とし、美によりて慰藉・満足を得んとする生活。故高山樗牛大に之を唱説したることあり。　（イ）

これも 20 世紀初頭に高山樗牛をはじめ、多く文芸思想用語として盛んに用いられ、後に日本に紹介される「耽美主義」とも関連深い語であるが、今日では用いられることがなくなった。

4.3 「二重生活」について

造語法の面から見ると、「二重ノ生活」であるから、おおまかな意味の推測は容易であるが、新語辞典では 26 点中 18 点が採用する語であるから解説が求められよう。

『日国』では、「二重生活」を 3 つのブランチに分け、「(1) 同一人が、職業・風俗・習慣などの外見が著しく異なる二つの生活を営むこと。また、一人が二つの生活の場を持つこと。(2) 和洋両様の生活様式をとり入れた生活。(3) 家族の構成員が何らかの事情によって別々のところで生活すること。」との語釈を与えている。そのうち、(1) の初出例を『や、此は便利だ』(ア 1) としている。ここで、ア 1 の語釈を次に引用すると、

（31）二重生活　同一の人にて、二様の生活を営むをいふ。例へば、ある文学者が、自己の感興によらずして、パンの為に筆を取り、一方に於ては、自己の趣味生活を営む如きは二重生活である。即ち、パンと趣味の両立を意味する。しかし、パンの為にとは言へ、常に自己の思想的に痛罵しつゝある職業に平気で従事するといふことは、生活の轍底を欲する人には堪へ難い所で、こゝに現代人の煩悶がある。この

煩悶・此の矛盾に対するアキラメ・ゴマカシの為の口実が即ち此の二重生活である。（ア 1）

これが、1919 年の増補版ア 2 になると、例（31）に加えて、「洋服と和服、和風建築、洋風建築の両様を用ふる如きにもいふ。」の語釈が補われる。『日国』の（2）の初出例を高田保（1950）『第 2 ブラリひょうたん』としているから、少なくとも辞書レベルでは 30 年ほど初出を遡ることになる。今回調査した新語辞典の中で、「二重生活」を見出しとして掲げた辞書は戦時中の 1942 年の『時局新語解説』（テ）だが、

（32）二重生活　中途半端な二様の生活態度をいふ。例へば和服と洋服、靴と下駄、洋室と和室といふ様に心ならずも二様の生活をする。その為経済上精神上多くの浪費をすることは物資消耗の上からも反省せねばならぬ。（テ）

といった書きぶりになり、精神面の苦悩に関しては閑却され、功利的な記述に傾いているのは、時代の趨勢によるものだったのだろうか。

現在では、（33）の例のように、『日国』（3）の意で用いられることが多くなったように思われる。

（33）「今だから打ち明けるが、君の私生活はすっかり知っているよ。金沢と帯広を往復して、二重生活をしていることをね。《略》」

荒巻義雄（1990）『能登モーゼ伝説殺紀行』

また、『日国』（1）は、「二重人格」の意と重なるような用い方をされることもあり、（34）（35）のような例も見られる。

（34）要するに私は二重人格みたいな、二重生活みたいなことをやって来たわけだ。男というものは複雑だからね。女房を満足させるような平穏な家庭生活だけでは息苦しいんだ。だからたいていの男は二重人格みたいな、二重生活みたいな生き方をしているのさ。

石川達三（1965）『洒落た関係』

（35）そのときから、わたしは二重生活を送るようになった。わたし

のなかで、ごく普通の人間として暮らす時間と、複雑な殺人計画で頭をいっぱいにして送る時間が、ぴったりと釣り合って共存していた。

宮部みゆき（1992）『とり残されて』

「二重生活」は今日まで多義語として記録されてきたので、多くの新語辞典に継続的に載録されてきたと考えられる。

おわりに

近代で活発に使用されるようになった「生活」と、その合成語を新語辞典の記述を中心に見てきた。その結果、20 世紀前半でも「生活」が前部分にある語では、19 世紀以来の「生命」に類する意味で用いられる語が見られ、人間のくらしや生き方に関する「生活」に絞られているわけではないことがわかった。また、「生活」が後部分にある語は、ほとんど「生命」に類する語はなく、20 世紀初頭は特に文芸や思想の用語としての用語も多く、人間としての思想的課題に関わる語が目立つことがわかった。さらに、前部分、後部分いずれも外国語の訳語として用いられた例も抽出された。このことによって、「生活」がやはり、いわゆる近代用語として定着してきたことが用例の面から跡づけられたと思われる。

参考文献

木村義之（2015）「近代文学における本文の変容をどのように考えるか―『一読三嘆当世書生気質』初刊本と『逍遙選集』本文の資料性について―」『言語事実と観点　No. 36』延世大学校

木村義之（2018）「近代用語としての「生活」とその周辺」沖森卓也編『歴史言語学の射程』三省堂

坂詰力治（1983）「せいけい（生計）、せいかつ（生活）、かつけい（活計）、せいぎょう（生業）、わたらい（渡らい）、なりわい（生業）、すぎわい（生業）、くちすぎ（口過ぎ）」『講座日本語の語彙 10　語誌Ⅱ』明治書院

引用文献

芥川龍之介（1927）「或旧友へ送る手記」:『芥川龍之介全集 9』（1978、岩波書店）
荒巻義雄（1990）『能登モーゼ伝説殺紀行』講談社
石川達三（1965）『洒落た関係』文藝春秋社
木下杢太郎（1940）「研究室裏の空想」:『科学随想全集 10』（1966、学生社）
島木健作（1937）『生活の探求』:『島木健作作品集 2』（1953、創元社）
宮部みゆき（1992）『とり残されて』文藝春秋社
柳田国男（1929）「自治と新選挙」:『定本柳田国男全集　別巻 2』（1964、筑摩書房）
吉本英一（1940）『新語と新形容』桑文社

引用辞書

〈和英辞典〉
井上十吉（1911）『新訳和英辞典』三省堂
井上十吉（1921）『井上和英大辞典』至誠堂書店
武信由太郎（1918）『武信和英大辞典』研究社
山口造酒・入江祝衛（1907）『註解和英新辞典』脩学堂書店
〈国語辞典〉
日本国語大辞典編集委員会（2000～02）『日本国語大辞典　第 2 版』小学館：ジャパンナレッジ版による。
落合直文・芳賀矢一編（1921～29）『日本大辞典　言泉』大倉書店
平凡社編（1934～36）『大辞典』平凡社
〈新語辞典：本文中の略称との関連〉
ア 1～チのうち、ア 1：南博編『近代庶民生活誌集成 3』（1985、三一書房）、ア 2：国会デジタルライブラリー、ア 3：架蔵本、テ：架蔵本、以外は、松井栄一ほか編『近代用語の辞典集成 1～23』（1994～95）により、ト～ニは、『日本世相語資料事典. 昭和戦後編 1～2』（2007、日本図書センター）によった。

なお、引用にあたっては、漢字は原則として現行通用字体に改め、仮名遣いはそのままとした。辞書の記号等は適宜省略したところがある。

注

1　木村（2018）で、19 世紀の英和辞書、英華辞書の記述を見て、指摘したことを以下に要約する。幕末の『英和対訳袖珍辞書』（1862）は Life に「生活、命」、『改正増補和訳英辞書』（1869）は「生活、命」にそれぞれ「セイクワツ、メイ」とルビが付される。訳語に英華字書の影響があるとされる『附音挿図

英和字彙』（1873）は Life に「生命（inoti）、生活（seikuwatu）、寿命（ジユミヤウ）、生涯（シヤウガイ）（以下略）」などとルビ付きで多義的に訳語を与え、Biology は「生活論」と訳されている。これは、ロプシャイト『英華字典』（1866-69）で Biology を「the science of life 生活之理，生活総論」と訳している例と通じる。ところが、井上哲次郎（1881）『哲学字彙』では Biology に「生物学」の訳語が与えられ、『改正増補附音挿図英和字彙』（1882）になると「生活論、生物学」のように訳語が併記されるも、後続する英和辞書では「生物学」に落ちつく、といった報告をした。

2 『日国』はある意味で現代の基準となる辞書であるから先頭に置き、国語辞典を『言泉』『大辞典』と続けて配置した。新語辞典をそれに続けて刊年順に並べた。整理の都合上、カタカナで略記したが、同一文字にア 1、ア 2、ア 3 のように算用数字を加えているのは、それらが改訂・増補の関係にあることを示している。

3 「生活」が前接成分となる語は、「生活改良普及員・生活困窮者・生活習慣病・生活準備説・生活綴方運動・生活補給金・生活保護法」（以上、日国）「生活協同組合」（日国、ナ）、「生活教育学・生活神経系」（大辞）、「生活科学会」（テ）である。それ以外には、「安価生活法」（ア 2、ア 3）、「学者生活改善中央委員会・金利生活者・国際農村生活委員会・最小生活費・最低生活費・初生児生活力薄弱・俸給生活者」（大辞）、「標準生活費」（言泉、大辞、ア 2、ク、ア 3）、「神人的生活観」（ウ）、「高度物質生活」（テ）である。

4 ○は、立項され、語釈を与えてあることを示す。△は立項されていないが、語釈中に当該の語が使用されていることを示す。▼は、見出しはあるが、他の見出しに送るいわゆるカラ見出し扱いであることを示す。